

誓歌の比喩

——かまぐらのみこしのさきのいはくえの——

末内紀子

I

ローライという名の妖精の岩は、美しい歌声で男たちを誘惑し、ライン川の波間にのみこんで水底に沈めてしまう。舟が暗礁に突きあたって難破する悲惨な事実を、ドイツの詩人ハイネは、何とやさしいことばで虚構したのでらう。まるであわれな人間の魂が女神によって救済されるのを祈るかの様だ。

我が万藤集もそんな風なファンタジーを奏でている。

鎌倉の見越の崎の

いはくえの君が悔ゆべき

心は持たじ

(14・三三六五)

右の一首は、「かまぐらのみこしのさきの

いはくえ」と「君が悔ゆべき心は持たじ」を結び合わせ、クエクユと響き合わせ、「かまぐらのみこしのさきのいはくえではありませんから、あなたのがっかりなさるような碎け心は持ちますまい」と愛を誓った歌である。私は決して心交わりいたしません。いくら汲んがも汲み尽せないのが思ひなのだから、いっそきれいに花や鳥や星や月をうたえばよいものを、なぜ波に崩れ苛まれたみにくい岩なのか。

妹もわれも清の河の

河岸の妹が悔ゆべき

心は持たじ

(3・四三七)

さ寝ぬ夜は千夜もありとも

わが背子が思ひ悔ゆべき

心は持たじ

(11・二五二八)

雨降れば激つ山川

岩に触れ君が砕けむ

心は持たじ

(10・二三〇八)

など類歌が多く、男が女に誓い、女が男に誓い、男も女も愛の約束をさらに口にしていく。清らかな気持を「清の河の河岸」にたとえたり、激しい情熱を「雨降れば激つ山川岩に触れ」にたとえたり、こんな比喩表現はいくらあっても珍しくないのだが、「かまぐらのみこしのさきのいはくえ」は在り触れていない。

それもそのはず、

相模の国の風土記に云はく、鎌倉の郡。見越の崎。毎に速き浪ありて石を崩す。

国人名づけて伊曾布利と号く。石を振るを謂ふなり。

と風土記も書き著すほどの名高い奇岩なのである。その正体は不明なのだが、石をふり落とすというのだから、伊曾布利はこわい物として恐れられていたのだろう。

にもかかわらず、

鎌倉の見越の崎の

伊曾布利の君が悔ゆべき

心は持たじ

とうたわな。風土記の世界を遠く離れることにより、伊曾布利に対する畏れを忘れ去ることにより、歌はいはくえという発想の自由を獲得し、クエクユと遊ぶことができたにちがいない。しかし、「かまぐらのみこしのさきのいはくえ」が愛を誓う歌の比喩表現であるためには、この言語遊戯の面白さを楽しむと同時に、あの風土記の伊曾布利のこわいみにくい記憶をよびもどさなければならぬ。伊曾布利にちがつて私は心変わりいたしませんと読めないことはないのである。クエクユとひつ懸けた言葉の秘密は二重のヴェールに覆われていると考え、風土記と万葉集の接点を捜し求めながらこの謎を解き明かしたい。

II

風土記のミサキの表現をみる。

意宇と号くる所以は、国引きましし八東水臣津野命、詔りたまひしく、「八雲立つ出雲の国は、狹布の稚国なるかも。初国小さく作らせり。故、作り縫はな」と詔りたまひて、袴袈、「志羅紀の三埼を、国の余ありやと見れば、国の余あり」と詔りたまひて、童女の胸鉤取らして、大魚のきだ衝き別けて、はたすき穂振り別けて、三身の綱うち掛けて、霜黒葛くるやくるやに、河船のもそもそに、国来々々と引き来縫へる国は、去豆の折絶より、八穂尔支豆支の御埼なり。此くて、堅め立てし加志は、石見の国と出雲の国との堺なる、名は佐比売山、是なり。亦、持ち引ける綱は、齋の長浜、是なり。亦、「北門の佐伎の国を、国の余ありやと見れば、国の余あり」と詔りたまひて、童女の胸鉤取らして、大魚のきだ衝き別けて、はたすき穂振り別けて、三身の綱うち掛けて、霜黒葛くるやくるやに、河船のもそもそに、国来々々と引き来縫へる国は、多久の折絶よ

り、狹田の国、是なり。亦、「北門の豊波の国を、国の余ありやと見れば、国の余あり」と詔りたまひて、童女の胸鉤取らして、大魚のきだ衝き別けて、はたすき穂振り別けて、三身の綱うち掛けて、霜黒葛くるやくるやに、河船のもそもそに、国来々々と引き来縫へる国は、宇波の折絶より、關見の国、是なり。亦、「高志の都都の三埼を、国の余ありやと見れば、国の余あり」と詔りたまひて、童女の胸鉤取らして、大魚のきだ衝き別けて、はたすき穂振り別けて、三身の綱うち掛けて、霜黒葛くるやくるやに、河船のもそもそに、国来々々と引き来縫へる国は、三穂の埼なり。持ち引ける綱は、夜見の嶋なり。堅め立てし加志は、伯耆の国なる火神岳、是なり。「今は、国は引き訖へつ」と詔りたまひて、意宇の社に御杖衝き立てて、「おゑ」と詔りたまひき。故、意宇といふ。

風土記のミサキの表現は出雲国に集中している。国引きの段。「しらぎのみさき」から「きづきのみさき」へ、「つつのみさき」から「みほのみさき」へ、ミサキからミサキへ

余りある国を引いて、小さな国を大きな国にしようというダイナミックな神話である。童女の胸組取らして、大魚のきだ衝き別けて、はたすき穂振り別けて、三身の綱うち掛けて、霜黒葛くるやくるやに、河船のもそもそに、国来々々……八束水臣津野命が呪文をとえながら、魔力をあたえながら、ゆずりゆずられつくる「きづきのみさき」と「みほのみさき」は、現実を超越して、神のミサキとして表現されている。

蛭蛭島。周り一十八里一百歩、高さ三丈なり。古老の伝へていへらく、出雲の郡、杵築の御崎に蛭蛭あり。天の羽々鷲掠り持ちて、飛び燕へり来て、此の嶋に止まりき。故、蛭蛭島といふ。今の人、猶誤りて袴嶋と号くるのみ。土地地豊沃之たり。西の辺に松二株あり。この外、茅、莎・薺頭蒿・藟等の類、生ひ靡けり。即ち牧あり。陸を去ること三里なり。美保の崎。周りの壁は、峙ちて埒しき定岳なり。

日常生活に根ざした「きづきのみさき」と「みほのみさき」は、たこの居るミサキであり、断崖絶壁のミサキでしかない。神話レベルと生活レベル。風土記のミサキの表現は二

つの極面をもつ。

前原の崎。東と北とは並びに龍從しく、下は則ち陂あり。周り二百八十歩、深さ一丈五尺ばかりなり。三つの辺は草木自から涯に生ふ。鶺鴒・鳧・鴨、隨時当り住めり。陂の南は海なり。即ち、陂と海との間は浜にして、西東の長さは一百歩、北南の広さは六歩なり。肆べる松翁鬱り、浜鹵は淵く澄めり。男も女も隨時戮り会ひ、或は愉樂しみて帰り、或は耽り遊びて帰らむことを忘れ、常に燕喜する地なり。

日常レベルで表現されている「さきはらのさき」。その険しい厓には四季の鳥たちが住み、その浜辺には松が茂り水が澄み、男も女もつどい会い、帰ることを忘れるほど宴するという。岩の上、陽氣にあそぶ人々のミサキである。

加賀の神崎。即ち窟あり。高さ一十丈ばかり、周り五百二歩ばかりなり。東と西と北とに通ふ。謂はゆる佐太の大神の産れまししところなり。産れまさむとする時に、弓箭亡せましき。その時、御祖神魂命の御子、枳佐加比売命、願ぎたまひつらく、「吾が御子、麻須羅神の御子に

まさば、亡せし弓箭出で来」と願ぎましつ。その時、角の弓箭水の隨に流れ出てけり。その時、弓を取らして、詔りたまひつらく、「此の弓は吾が弓箭にあらず」と詔りたまひて、擲げ廃て給ひつ。又、金の弓箭流れ出て来けり。即ち待ち取らしまして、「闇鬱き窟なるかも」と詔りたまひて、射通しましき。即ち、御祖支佐加比売命の社、此処に坐す。今の人、是の窟の辺を行く時は、必ず声磗磗かして行く。若し、密かに行かば、神現れて飄風起り、行く船は必ず覆る。

非日常レベルで表現されている「かがのかむさき」。その厓の窟で佐太の大神が産まれ、母神の支佐加比売命がまつられ、そこを通る時は必ず声をとどろかせないと、こっそり行くと、神が怒って飄風を起こし船がてんぶくしてしまふという。岩の中、闇にねむる神々のミサキである。

風土記のミサキの表現は、日常レベルと非日常レベル、岩の上と岩の中、陽氣にあそぶ人々のミサキ、両極面をもつ。

もちろんいうまでもなく風土記は、幾内七道諸国、郡郷の名好字を著け、その郡内生ずる所の銀銅彩色草木禽獸魚虫

等の物つぶさに色目を録し、および土地沃墾、山川原野の名号の所由、またも老相伝ふる旧聞異事、干史籍に載せて言上せよ。(続日本紀和銅六年五月二日条)という官命の規定事項に基づいて筆録編述されたわけである。それはそれとして、今は、こうした風土記全体の制度の枠からミサキに關する記事の部分だけを取り出した。

III

万葉集のミサキの表現をみる。

修飾語の有るミサキ

神さぶるあらつのさき
草陰のあらぬのさき
あられ降りかしまのさき
言さへくからのさき
釧つくだふしのさき
神さぶるたるひめのさき
あちかをしちかのさき
馬の爪つくしのさき
妹が目をあとみのさき
おしてるなにはのさき
夏草ののじまのさき
ちはやぶるかねのみさき
修飾語の無いミサキ

あれのさき
いそさき
いほさき
おほさき
からさき
きよみのさき
さでのさき
しでのさき
しぶたにのさき
たこのさき
つをのさき
みうらさき
みこしのさき
みつのさき
みぬめのさき
みねのさき
みががさき
やらのさき
ゆらのさき
をふのさき

万葉集のミサキの表現は、修飾語の有るものと無いものにはつきりと区別することができ。有るものは有るし無いものは無い。二つの領域は重ならない。

修飾語の無いミサキの表現は、

平布の崎漕ぎたもとほり
ひねもすに見とも飽くべき
浦にあらなくに (18・四〇三七)
と、「をふのさき」は、舟を浮かべてひがな一日ながめていても見飽きないミサキであり、

島伝ひ敏馬の崎を
漕ぎ廻れば大和恋しく

(3・三八九)

と、「みぬめのさき」は、鶴のしきりに鳴くミサキであり、

朝開き漕ぎ出て我は
湯羅の崎釣する海人を
見て婦り来む (9・一六七〇)

妹がため玉を拾ふと
紀の国の湯羅の崎に

(7・一二二〇)

と、「ゆらのさき」は、魚釣りをしたり玉拾いをしたりするミサキである。

修飾語の有るミサキの表現は、

足柄のみ坂給はり
顧みず我は越え行く
荒し男も立しやはばかる
不破の関越えて我は行く
馬の爪筑紫の崎に

留まり居て我は斎はむ

諸は幸くと申す

帰り来までに

(20・四三七二)

と、「馬の爪つくしのさき」は、防人が家族の無事を斎うミサキであり、

神代より言ひ伝て来らく

そらみつ大和の国は

皇神の蔽しき国

言霊の幸はふ国と

語り継ぎ言ひ継がひけり

今の世の人もことごと

目の前に見たり知りたり

人さばに満ちてはあれども

高光る日の大朝廷

神ながら愛での盛りに

天の下奏したまひし

家の子と選ひたまひて

勅旨戴き持ちて

唐の遠き境に

遣はされ罷りいませ

海原の辺にも沖にも

神留まりうしはきいます

諸の大御神たち

舟船に導きまをし

天地の大御神たち

大和の大国魂

ひさかたの天のみ空ゆ

天翔り見渡したまひ

事終はり帰らむ日には

また更に大御神たち

舟船に御手うち掛けて

墨縄を延へたごとく

あちかをし値嘉の崎より

大伴の三津の浜辺に

直泊てにみ舟は泊てむ

つつみなく幸くいまして

はや帰りませ

(5・八九四)

と、「あちかをしちかのさき」は、好去好来を祈るミサキである。

又、

神さぶる荒津の崎に

寄する波間なくや妹に

恋ひ渡りなむ

(15・三六六〇)

神さぶる垂姫の崎

漕ぎ巡り見れども飽かず

いかに我せむ

(18・四〇四六)

ちはやぶる金のみ崎を

過ぎぬとも我は忘れじ

志賀の皇神

(7・一二三〇)

と、「神さぶるあらつのさき」や「神さぶる

たるひめのさき」や「ちはやぶるかねのみさき」は、文字どおり神々しいミサキなのである。

たとえば、かねのみさきには不思議な伝説がある。

鐘の御崎。織幡の神のある山の出崎を云。

昔三韓より大なるつりがねを渡せしに、

此津にしづめり。故に鐘の御崎と云。鐘

のある所は、織幡山の良の方五町計おき

にあり。今も鐘のある所いちじるしく見

ゆるよし、里人いえり。

(筑前国統風土記)³

筑前に遊びし時、博多の崇福寺に暫くと

どまりて、此あたり一見す。詩を賦し禅

を談ぜしとき、当国の奇事をとひし

に、其座に在る人の日、此国の海中に鐘

あり。其処を鐘が岬といふ。織幡山の良

の方、岸を離る、事纔に五町ばかりの所

にあり。船にて其処にいたれば、よく見

ゆるよし里人いふ。是はむかし三韓より

撞鐘をふねに積て渡せしに、龍神鐘を望

み、此海にいたりて浪風俄に起り、船く

つがへりて、鐘は終に海底に沈みぬ。⁴

(西遊記統編)

かねのみさきの名の由来譚。むかし三韓か

ら鐘を船に積んで海を渡った時、竜神が鐘を望んで浪風を起こしたため、船はてんぶくし、鐘は海の底に沈んでしまったという。この竜神こそ、志賀の皇神であり、ちはやぶるかねのみさきそのものなのであろう。

幼き心地に母君を忘れず、をりをりに、「母の御もとへ行くか」と問ひたまふにつけて、涙絶ゆる時なく、むすめどもも思ひこがるるを、舟路ゆゆしと、かつは諫めけり。……金の岬過ぎて、「我は忘れず」など、世ともの言ぐさになりて、かしこに到り着きては、まいて通かなるほどを思ひやりて恋ひ泣きて、この君をかしづきものにて明かし暮らす。

(源氏物語玉鬘巻)

玉かづらが筑紫へ下る場面。幼い子供が「我は忘れず」とこの歌を口ずさむのは、亡き母にあえますようにとかねのみさきに向かつてちいさな手を合せているのかもしれない。神を信じるとか信じないとかいうのではなく、ミサキにまつわる複雑怪奇に魅せられた少女の心は、神秘を感じ、奇跡を願い、祈らずにはいられなかったのであろう。

万葉集のミサキの表現は、修飾語の有るものと修飾語の無いもの、人々の穏やかな生活

を明るくうたりミサキと神々のあれ狂う歴史を暗くうたりミサキ、両極面をもつ。

IV

いくら汲んでも汲み尽せないのと思ひなのだから、いつそきれいに花や鳥や月や星をうたえよよいものを、なぜ波に崩れ奇まれたみにくい岩なのか。

かまぐらのみこしのさきのいはくえに誓つて心変わりいたしませんと読む。「鎌倉の見越の崎のいはくえ」と「君が悔ゆべき心は持たじ」を結び合わせ、クエクユと響き合わせた比喩表現は二重構造であると考ええる。

風土記と万葉集。伊曾布利といはくえ。風土記の世界を遠く離れることにより、伊曾布利に対する畏れを忘れ去ることにより、歌はいはくえという発想の自由を獲得し、クエクユと遊ぶことができたにちがいない。しかし、「かまぐらのみこしのさきのいはくえ」が愛を誓う歌の比喩表現であるためには、この言語遊戯の面白さを楽しむと同時に、あの風土記の伊曾布利の神々しい記憶をよびもどさなければならぬ。

風土記のミサキの表現も万葉集のミサキの表現も両極面をもつ。岩の上で陽気にあそぶ

人々のミサキと岩の中で闇にねむる神々のミサキ、人々の穏やかな生活を明るくうたり修飾語の無いミサキと神々のあれ狂う歴史を暗くうたり修飾語の有るミサキ、二つの面をもつ。いはくえが伊曾布利であるならば、伊曾布利が神々のミサキであるならば、クエクユとひつ懸けたのは、ふたつの領域をひとつに纏めて神と人を繋ぐため。いはくえの伊曾布利のミサキの中でねむる神といはくえの伊曾布利のミサキの上であそぶ人の秘密の関係を意味している。そうして、神と人との約束はそのまま男と女との約束に置き換えられる。ミサキと誓い。誓いと比喩。比喩とミサキ。この三位一体の言葉の力が愛を誓う歌の比喩表現のあり方なのである。

1、誓歌の定義について。中西進の説(講談社文庫『万葉集三』)に従い、この歌を「女の誓い歌」とみる。折口信夫が「不安な自然現象・山・川等にかけてするのが誓約であった」とも述べている(『万葉集総釈』)

2、伊曾布利の解釈について。大系本や日本国語大辞典は「磯辺にうちよせる波」としている。代匠記は「鎌倉の見越の崎のいはくえ」としている。この資料を最初に引用した契沖の説に従う。

- 3、『古事類苑』四・一三三三頁
- 4、『古事類苑』四・一三三四頁